



令和5年度 第1回 佐倉路地裏探検隊探索  
 (佐倉城下町路地裏探索 第Ⅱ回目)



令和5年4月19日(水)



侍の杜の池



但馬家の黒椿一輪

# 佐倉路地裏探検隊

小字名；角川「日本地名台辞典 12 千葉県」（昭和59年発行）による

1. 鐮木（かぶらぎ）；印旛沼に注ぐ鹿嶋川・高崎川右岸に位置する

【近世】鐮木村：江戸期から明治22年の村名。下総国印旛郡のうち。佐倉藩領。村高は「元禄郷帳」467石余。「天保郷帳」「旧高旧領」共に476石余、うち海隣寺領30石を含む。慶長15年土井利勝の佐倉入封に伴い鹿嶋城（佐倉城）の再築が始り、佐倉城三の丸外にあたる地域の住民は強制移住させられ、城外の江原新田・萩山新田の起源となった。元和以降の佐倉城下町は大部分が大部分が当村を割地して造成したものである。元禄14年村差出によれば、村高のうち19石余の永引きや諸役御免70石がある。安政4年（1857）「領分村高帳」によれば、小物成として夫役永1貫103文余・茶園代永17文・草刈代金1両・林下蒔錢鏝（びた）400文が見える。明治6年千葉県に属す。神社は麻賀多神社、寺院は真言宗 大聖院・重願寺、曹洞宗周徳院・且勝善寺、日蓮宗妙隆寺他薬師堂等（印旛郡誌）明治22年 佐倉町の大字となる。

【近代】鐮木町；明治22年～現在迄の大字。はじめ佐倉町、昭和29年からは佐倉市の町名。明治24年の戸数185・人口939・馬34・船4。大正15年京成電気軌道（現京成電鉄）京成佐倉駅開発。昭和19年旧堀田邸が佐倉日産厚生園となった。一部が昭和44年栄町、同48年 鐮木1、同2丁目となる。昭和54年の世帯数747、人口2,371

【近代 鐮木】；昭和48年から現在の佐倉市町名。1～2丁目がある。元は佐倉市六崎、鐮木町の一部。昭和54年では1丁目世帯数118、339人、2丁目73、217人）

2. 海隣寺町；

※海隣寺（寺院）；佐倉市海隣寺町にある時宗当麻派寺院で、山号は千葉寺。本尊は阿弥陀如来。治承3年7月（1179）千葉常胤が一族を率いて海辺に行き月の昇のを見ると、海上に異光が輝いていた為、網を投じたところ金色の阿弥陀如来を得た。よって文治2年10月（1186）千葉郡馬加村（現 千葉市幕張）に1寺を建立し、如来像（“海上宗”に改宗し、他阿真教上人（たあしんきょうしょうにん）を中興開山とした。貞胤の子氏胤は父の遺言に従い当寺を経営し、常胤以来の影像を安置した。これにより千葉氏の菩提寺として同氏の外護を得て栄え、輔胤の代には居城を佐倉に移ると共に当寺も移転した。戦国期の関東では小田原北条氏が相模無量光寺を保護した為、当麻派は勢力を伸ばし、同盟関係にあった千葉氏の保護を受けた同派の当寺も隆盛を極めたが、千葉氏の滅亡と共に次第に廃れた。慶安元年（1648）30石の朱印地を寄せられた。延享2年（1745）の当麻派末寺帳にその名が見える。現在はその往時の面影をしのぶ事は出来ない

1) 海隣寺町；

【近代】；海隣寺町；明治9年～明治22年の町名。明治22年佐倉町、昭和29年には佐倉市の町名に。明治9年に佐倉城下町のうち、海隣寺門前が改称して成立。神社は愛宕神社（元は田町にあり）、熊野神社。明治24年の戸数は51、人口261。昭和54年世帯数61、人口199

2) 海隣寺門前；

【近世】；江戸期～明治9年の町名。江戸期の佐倉城下町の一つ。時宗海隣寺は、鹿嶋幹胤の鹿嶋城（後の佐倉城）築城工事中。天正末年頃千葉氏の菩提寺である海隣寺を酒々井から現在地に移された。元禄年間迄は鐮木村に属す。元和年間（1615～1624）境内は東西169間=304m・南北180間=324m）。同寺は慶安元年（1648）朱印30石を賜る。寛文年間（1661～1673）には裏門前、海隣寺境内、於茶屋の区分があり、元禄年間（1688～1704）に鐮木村から分かれ、海隣寺門前と称さえる。なお、田町から新町への街路は海隣寺門前（現並木町）と呼ばれた。明治4年の戸数50、うち農業4・商業15・大工8等。明治9年海隣寺町と改称。

3) 海隣寺並木 (現並木町) ;

【近世】 ; 江戸期～明治9年の町名。江戸期佐倉城下町の一つ。元籙木村のうち。元和年間 (1615～1624) に佐倉城が完成した際、海隣寺門前から新町 (横町) の間の無住の地を往還でつなぎ、海隣寺並木と呼び武家屋敷地とした。舟見町を含め城外並木と公称された。はじめ往還の東側に家臣の屋敷が集中し、西側は海隣寺寺内であった。のち寛永・万治年間 (1624～1661) 頃寺内の南半分は、家臣での最高禄高5000石を持つ深見縫殿助の屋敷が出来、寛永年間 (1624～1644) にはそれが番頭の組長屋となり、奥には清兵衛長屋が建てられた。更に享保年間に、組長屋は上級藩士稲葉氏の屋敷になった。江戸中・後期には東側は新建長屋と呼び、表通りは一戸建て屋敷、裏通りに長屋が多く、西側の表通りは小役人長屋が並びその奥が清兵衛長屋であった。舟見町を含め明治4年の世帯数104・人口261。昭和54年の世帯数61・104。うち士族68・卒族36、明治9年並木町の一部になる

3. 並木町 ;

【近代】 並木町 ; 明治9年～22年は佐倉を冠称。明治22年佐倉町。昭和29年からは佐倉市の町名の一つ。明治9年江戸期城下町のうち、城外並木町のうち城外並木と舟見町が合併して成立。江戸期は城外並木と公称された地域にあたり、高岳・坂上新建・新建・舟見町の4つの曲輪があった。神社は稻荷神社等。明治24年の戸数167・人口744、馬3、船1 昭和54年の戸数180・人口617

4. 田町 ;

【近世～近代】 田町 ; 江戸期～現在の町名。明治9年～22年佐倉を冠称。江戸期の佐倉城下町の一つ。明治22年佐倉町、昭和29年からは佐倉市。天文年間 (1532～1555) 千葉 (鹿島) 幹胤が鹿島城 (佐倉城) の築城を機に、寺社と共に鹿島村の住民を鹿島山東麓に移転させたのが当町の始り。助左衛門稲荷は名主金子助左衛門の先祖が鹿島村に祀っていた為といわれる。天正19年 (1614) の検地では佐倉田町として高74石と見え、佐倉を冠しているのは酒々井の本佐倉を佐倉と呼んだのに呼応させ、鹿島城の地もはじめて佐倉の一部として認識されたことを示す。佐倉藩領。村高は「元禄郷帳」74石余、「天保郷帳」「村高旧領」共に76石余。佐倉牧のうち柳沢牧野付村の一つ。安政4年 (1857) 「領分村高帳」によれば高20石余が諸役御免となっており、小物成として夫役永162文余・野銭鏹500文が見える。佐倉藩の廻米は、印旛沼の北須賀河岸から城内椎木蔵に輸送された為、鹿島川沿いに田町河岸が設けられ、佐倉～江戸間の物資出入の拠点となった。中世末以来商工業が発達し、特に紺屋・物師・鍛冶屋・鼈甲細工師・塗師・馬具師等がいた。佐倉道より城下への入口で、お茶屋等も多い。明治7年佐倉連隊が設置された。明治24年の戸数159・人口761・馬1・船5、昭和54年の世帯数284・人口936

5. 鑓木小路 ;

【近世】 ; 江戸期～明治9年の町名。元和年間 (1615～1624) 佐倉藩主 土井利勝は佐倉城の完成と同時に家臣の主たる者を当地に住ませた。その一つが鮭延越前守秀綱の広大な屋敷があり、秀綱とその家臣の屋敷の両方で殆ど埋まっていた。江戸中・後期に若林氏、植松氏の家老屋敷や中級の藩士屋敷となった。また、大聖院境内の東部に大筒の射場とした。明治4年の戸数15のうち士族69・卒族36。明治7年歩兵連隊設置後は歴代連隊長の官舎も当地にあった。明治9年宮小路の一部となる

6. 宮小路 ; 印旛沼南部、高崎川右岸の丘陵地上に位置する。地名の由来は、もと麻賀多神社から延びる小路であった為

【近世】 宮小路 ; 江戸期～明治9年の町名。江戸期の佐倉城下町の一つ。佐倉城が完成した元和2年 (1616) 頃、城外では最も城に近い所として武家屋敷地となった。麻賀多神社前から大手門までは道幅5間=9m、長さ180間=324m。なお、建設当時の新町の西端は同神社内にあたる。道の両側には一戸建ての侍屋敷が建ち並び、寛文年間 (1661～1673) になると同神社境内東側は町屋になる。大手門外南側の空堀付近は中級の侍屋敷が続き、妙隆寺境内西側には小役人長屋があった。天保7年 (1836) 藩校成徳書院が大手門外に開校。付属の演武場・医学所も設置された。付近には武術の師範や医学所の教授等の屋敷が軒を連ねた。北部の味噌部屋は、元侍屋敷であったが寛文年間味噌蔵が置かれ、合わせて2軒の長屋が建てられた。この長屋に続いて砲術稽古場があった。明治になり、士族授産の為佐倉相濟社という工場が設置された。日本最初の様式機械による製靴・綿織業が行われた。明治9年宮小路町の一部となりました

【近代】 宮小路町 ;

明治9年～現在の町名。明治9年～22年は佐倉を冠称。明治22年佐倉町、昭和29年からは佐倉市の町名。明治9年元佐倉城下町のうち宮小路・鑓木小路が合併して成立。明治24年の戸数115・人口600、馬7。藩校成徳館 (旧成徳書院) h、明治6年鹿山中学、のち佐倉集成学校を経て明治30年私立佐倉中学校になり、同32年県立に移管、同43年鍋山町に移転。昭和54年の世帯数275・人口779

7. 城内町；

【近代】；昭和45年～現在の佐倉市の町名。元は佐倉市鹿島町・田町・海隣寺町・宮小路町に接する官有地。地名は中世の鹿島城及び江戸期の佐倉城内の意味。昭和54年の世帯数277・人口836。同58年国立歴史民俗博物館が開館

8. 栄町；

【近代】栄町（さかえちょう）；昭和44年～現在の佐倉市町名。元は佐倉市鑄木町の一部。昭和54年の世帯数74・人口233

9. 新町；

【近世～近代】新町（しんまち）；江戸期～現在の町名。明治9年～22年は佐倉を冠称。江戸期の佐倉城下町の一つ。明治22年佐倉町、昭和29年からは佐倉市の町名。慶長15年（1610）土井利勝の佐倉入封以前、徳川氏が酒々井の大堀に根古谷城に代わる新城を予定し城下町の建設に着手したが、利勝入封に際し鹿島城の再興に変更された。同時に鑄木村の山林を切り開いて商人町が当町である。「各村給分」では佐倉藩領、「旧高旧領」では幕府領。村高は「元禄郷帳」「天保郷帳」「旧高旧領」ともに54石余。街路形成に際し、佐倉城の一部として城の防御を考慮して屈曲を造った。嘉永元年（1848）絵図によれば504間=907m長さの街路に、182軒の店舗・町屋が並んでおり『佐倉新町江戸まさり』とも称された。町内は、横町・上町・神二番町・仲町・肴町・間之町に別けられた。横町入口に火防木戸番・番小屋、要所4か所に辻番（箱番）を設置。当町では町人の店舗地に対する貢租は免除され、営業税としての真加金を上納。商人・職人等の統制の為、新町と弥勒町に各2名行司を置き、それぞれ郷宿につめ藩庁との仲介役も務めた。当町では継続的ではないが定期市が開かれた事もあった。寺院は浄土宗教安寺、浄土真宗延覚寺、臨済宗宗円寺、天台宗甚大寺、曹洞宗嶺南寺。明治5年新町小学校開校、同8年裏新町に移転。同20年 吉田伝衛門が佐倉英学校を設立。同22年佐倉町役場が置かれた。同24年の戸数283・人口1460・馬6、昭和54年の世帯数277・人口947

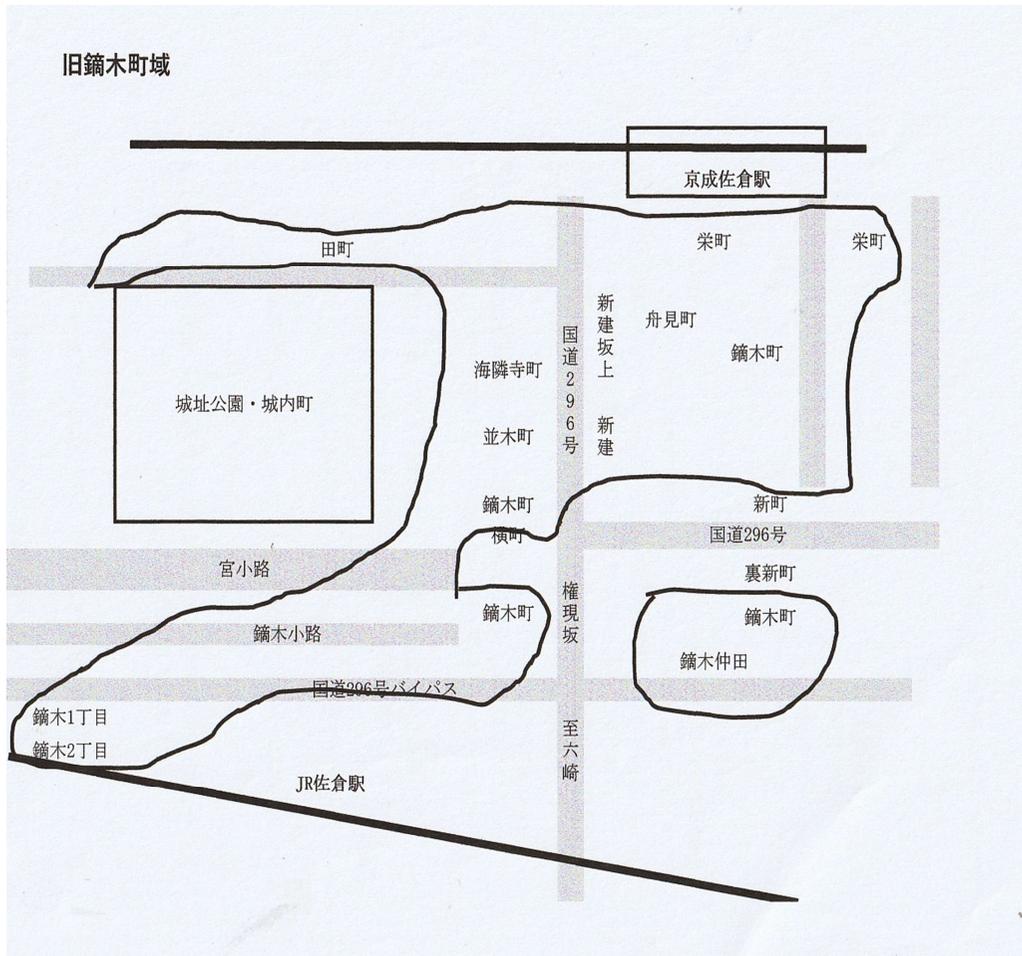
10. 裏新町；

【近世～近代】裏新町；江戸期～現在の町名。明治9～同22年は佐倉を冠称。江戸期の佐倉城下町の一つ。明治22年佐倉町、昭和29年佐倉市の町名。江戸初期城下町の造成によって新町通りに並行して造られ、通りの右側に当たった為「城外新町右側」と公称された。元和頃（1615～1624）迄は鑄木村内。のち小役人長屋が建並び、西側から大部屋（中間部屋）・新長屋・同心長屋に区分された。その東端には寛文年間（1661～1673）～明治初年（1868）の間牢獄が設けられた。明治になって下級藩士の屋敷地となり、同4年の戸数48、うち士族13・卒族35、商工業者はゼロ。同8年新町より新町小学校を大部屋に移転し新陽小学校にと改称。同21年佐倉尋常小学校に併合、神社は稻荷神社等。明治24年の戸数56・人口238・馬1・船1、昭和54年の世帯数51・人口141

11. 弥勒町；

【近世～近代】弥勒町（みろくまち）；江戸期～現在の町名。明治9～22ねんは佐倉を冠称。江戸期の佐倉城下町の一つ。明治22年佐倉町、昭和29年からは佐倉市の町名。もと鑄木・大蛇村の入会地で、慶長年間（1596～1615）佐倉藩主土井年勝により松林寺が創建されてから開発が進んだ。佐倉藩領。村高は「元禄郷帳」42石余、「天保郷帳」「旧高旧領」共に46石余。宝永4年（1707）水帳によれば家数60・反別畑7町余で、そのうち新町の越石（こしこく）や寺領が2町7反余。また佐倉牧のうち柳沢牧野付のj一つ。安政4年（1857）「領分村高帳」によれば人馬役御免で、小物成として夫役永107文。北西部の踊尾余には寛文以降（1661）足軽古屋10棟が建ち、その東側には角場（鉄砲射場）が設けられた。町屋は商業特に江戸中期以降卸売商を主とし、新町や佐倉近隣へ卸売した。神社は八幡神社、寺院は浄土宗松林寺・曹洞宗勝寺・日蓮宗妙経寺。明治24年の戸数116・人口705・船1、昭和54年の世帯数372・人口1166

12. 旧鑓木村・鑓木町域；佐倉市mの住居表示は未だ小字名多く採用しおている子著もあり飛地があつたり右翼分らない場合が多いです。鑓木町、大蛇、上志津、下志津等。出来るだけ小字名を残して欲しい。飛地は避けて欲しい。新町名は極力小字名を活かして欲しい



### 13. 旧江原台駅；JTBパブリッシング

石本祐吉著 「京成の駅今昔・昭和の面

昭和34年10月18日から20日までのたった3日間の駅です。軌道幅を変更する為の仮の駅です。ふるさと広場近くの駅です。乗客はこの駅で乗換。駅の外には出れません

□千葉県佐倉市江原台 □上野から48.1 km 押上から42.3 km  
□昭和34年(1959)10月18～20日

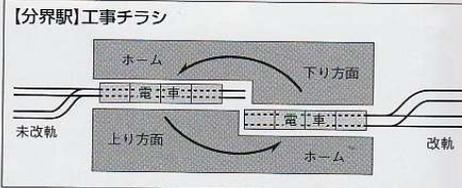
京成が地下鉄乗り入れのため全線にわたって軌道を変更する工事を行った昭和34年(1959)10月18日から20日までの3日間存在した仮駅。当時の臼井駅から成田に向かって2つ目のカーブを越えたあたり、佐倉市江原台の田んぼの中に設置され、改軌の終わった成田方の列車と未改軌の上り側の列車の乗り換えのため、線路の両側には仮設の木製ホームが設けられた。

改軌工事は全線を11の工区に分けて千葉、成田方から開始され、中間に合計10の分界駅が設定されたが、工事距離の関係から唯一、既存駅以外に設けられたのがこの仮駅である。現在も線路の北側(印旛沼側)は田んぼや畑ばかりだが、反対側には江原台団地や聖隷病院などもあり、新駅を期待するかの如く駅前広場なども見られるものの、今のところ駅設置の動きはないようである。

改軌工事期間中、乗客はこのような分界駅で軌道の異なる列車を乗り継がなければならなかった。この仮駅はその目的だけのために設けられた唯一の分界駅で、駅の外には出られない。左が未改軌の上野行、右が改軌の終わった成田行。3050形新車は新しい赤電塗装で改軌のシンボルだった。S34.10.21



下り方面の仮設ホーム。S34.10.21



工事期間中は普通列車のみの臨時ダイヤで、乗客はこのような分界駅で改軌済みの列車と未改軌の列車とを乗り継いだ



たった3日間の臨時駅で、乗客はこの駅で未改軌から改軌済方面電車に乗り換えなければなりません。3日間の工事期間だけの駅です。将来佐倉駅と臼井駅の間にあり、”将来新駅が出来る”という宣伝をした新興住宅開発会社から住宅をお買いになったというお話をお聞きした事もあります。新駅が出来るという事で駅前に小さ過ぎるロータリもあります。ふるさと広場側は大きな水田整備地で、住宅が開発される見通しもあります。しかし、現在の技術では土地開発、水対策、下水開発等多額の費用が必要ですが。要はその費用を負担するかであります。いっそ臼井の船戸大橋迄ふるさと広場を公園化し、スケボ・ローラスケート等スポーツ施設、市内の商家、旧家、蔵の移築、水車、風車、民族資料館、1～2階建ホテル、Eスポーツ施設等新設。印旛沼よりの揚水場所、内水面水産試験場の一部常時公開化、くさぶえの丘とふるさと広場との高低差を利用し安全を重視したターラ長のローラ滑り台新設。大きく岩名運動公園を起点とし、ふるさと広場を包含した印旛沼を佐倉市の長期的観光行政にしては如何でしょうか。その為には、車道の整備、歩道の確保、街灯・監視カメラの設置、桜と河津桜の混植による花期の長期化による花見イベント実施、印旛沼周囲の印西市、佐倉市、酒々井町等との広域・共同印旛沼整備による集客化。JR佐倉からの集客の為、JR佐倉駅から城址公園とふるさと広場との間に変形(子供が好きそうなパンダ等動物方)循環バスの運行と樋口橋から印旛沼周遊和船運行。

長期的視野に立ち、優先じゅゆんいを付けて7、8年ぐらいの計画で実施してゆけば良いのでは。現在の固定観光資源では十分ではないので兎角イベント観光客に頼らざるを得ないが、その数も減少気味です。固定観光資源も見直し何が良く、何が悪いのか再度調査。既存資源に何を手直しすれば観光客に結び付くか、佐倉市の魅力を高めるか市民の声を真剣に吸収せねばならないと思います。おざなりの調査、おざなりの分析・会議、おざなりの実施案、短期・長期の実施案の見直し等やるべき事が一杯あります。佐倉市自身の問題としては、道路事情の悪さ、歩道の不十分さ、駐車場不足、トイレ不足、案内板不足、案内人の不足、交通手段の見直し等観光都市として宣伝するならこちらも整備する必要があると思います

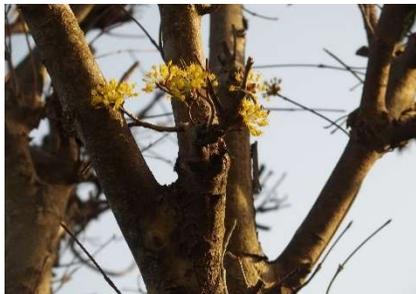
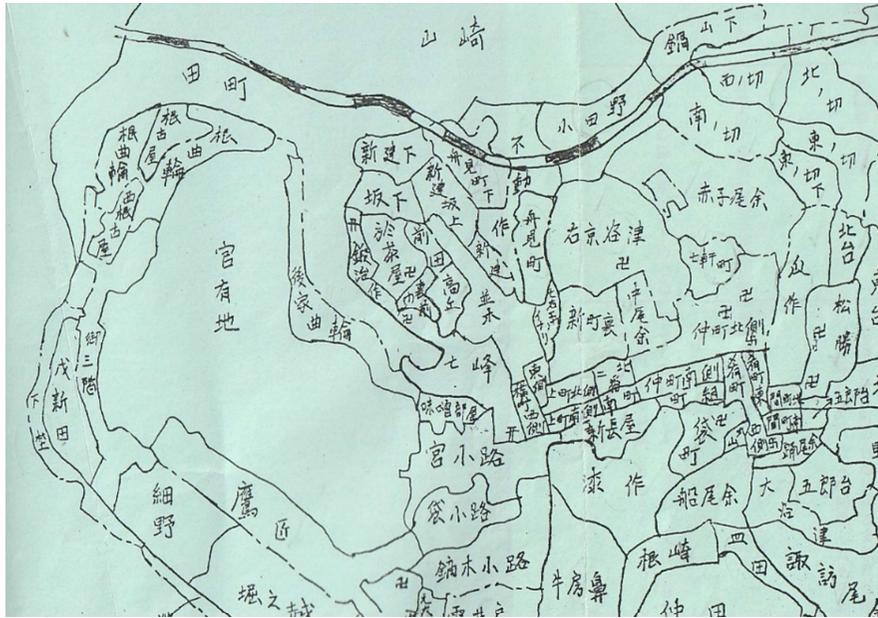


#### 14. 佐倉城内・城下町図

「古今佐倉真佐子」に記載の1720年前後の佐倉城内・城下町です。地図に書かれた名前、建物名、通り名等等虫眼鏡で見てください！新しい発見があります！



15. 小字マップ；城下町佐倉



鹿島橋

愛宕坂

田町門

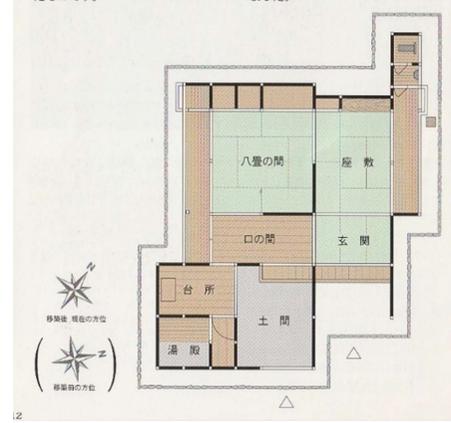
16. 武家屋敷の間取り：佐倉市教育委員会 「武家屋敷」の転写



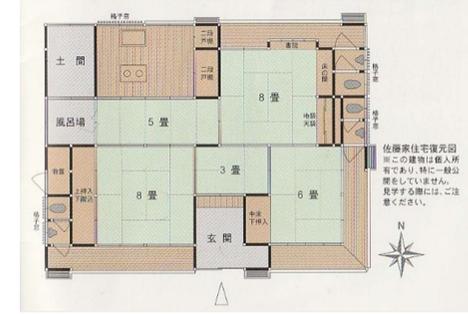
河原家間取り



但馬家間取り



武居家間取り



非公開 (中尾余町) 佐藤家間取り

居室の制一覧 (独立住宅について)

	千石以上	三百石以上 【大屋敷】	百石以上 【中屋敷】	小知 【小屋敷】
建坪	81坪より 261坪まで	39坪より 63坪まで	27坪より 33坪まで	24坪内外 長屋の場合6間18坪
門	長屋門又は腕木門 冠木門扉 重門は禁止。	腕木門又は長屋門	腕木門又は木戸門 長屋門は禁止。	木戸門 今の腕木門は横わない が修復時木戸門にする。
玄関	2間半 現今3間ならば許す。 破風作・舞良戸は許す。	2間 破風作・舞良戸は 元からある分は許す。	2間 箱段のみ。式台は付けても 良いが破風作・舞良戸禁止。	箱段のみ 中の口を兼ねる。 式台も可。
長押	可 書院、座敷、居間、内縁。 ただし上段の間に 金銀貼付禁止。	旧造は可 座敷、居間、玄関のみ。 新規は禁止。	座敷でも不可	—
畳	近江表へり付 玄関、書院、座敷、 居間向、内縁。 七嶋表 内玄関其外勝手向。 へり無 台所、廊下向。	近江表へり付 座敷、居間向。 七嶋表 玄関他。 へり無 廊下其外勝手向。	近江表へり付 座敷。 七嶋表へり無 玄関、居間。	七嶋表に限る へり付は 玄関、座敷のみ。 その他へり無。

※居住の制は、新規の住居について適用されたもので、以前からある建物については修理・改築の際に規制する事になっていました。また、下男部屋・厩は別棟、物置ともに上記の規定外での坪数に含まないと記されています。なお、別に下級武士の長屋について項目もありますが、こちらは略しました。

佐倉藩 天保4年(1833)の「天保御制」に武家住宅の基準



17. 散策マップ



①



②



④



⑤

旧堀田邸敷地(農園等)



旧堀田邸間取り

# 地区スポット説明

1	2	3	4
<p style="text-align: center;"><b>佐倉市役所</b></p> 	<p style="text-align: center;"><b>海隣寺</b></p> 	<p style="text-align: center;"><b>海隣寺の石仏</b></p> 	<p style="text-align: center;"><b>海隣寺於茶屋遺跡</b></p> 
<p>ご存知 黒川紀章デザインの建物で日本モダニズム建築に認定されています。1971年(昭和46年)建築です。外部はモダニズムかもしませんが、外部から見える窓ガラスの部屋は各フロアの来客打合せコーナーです。非効率的な内部です</p>	<p>千葉国保良院(寺号)で、千葉市流石の海にも登場。千葉氏の祖とも)が治承3年(1179)に海上に光る金色の阿弥陀如来像(月越如来)を発見し、文治2年(1186)に幕張に真言宗の寺院として堂宇を建立。千葉貞胤の代に一遍上人に帰依し時宗に改めました(白井の光勝寺と々)。千葉氏の移動に伴い千葉亥鼻から、本佐倉城下の酒々井、千葉邦胤の代に鹿島城下の現在地に移転しました</p>	<p>享保13年3月造立(1728)の寒念仏供養塔です。寒中30日間読経する修行の意</p> 	<p>縄文時代から近世に亘る遺跡で、弥生時代～奈良・平安時代迄の竪穴住居遺跡22棟が発見された。2号館建設時委は縄文1棟、弥生1棟、古墳6棟、奈良・平安23棟他土師器、須恵器、紡錘車等も出土しています。</p>
			 <p style="text-align: center;"><b>海隣寺於茶屋遺跡</b> KAIRINJI OCHAYA-SITE</p> <p>市役所の敷地を中心とする各地は、縄文時代から近世にわたる遺跡で、過去に2度発掘調査されています。 昭和55年に社会福祉センター(4号館)の建設に伴う調査が行われ、弥生時代から奈良・平安時代(およそ1,400年前から1,000年前)までの竪穴住居遺跡22棟が発見されました。 平安百年には2号館の建設に伴う調査が行われ、縄文時代1棟、弥生時代1棟、古墳6棟、奈良・平安時代23棟、竪立柱建物跡3棟、竪穴の溝1基が発見されました。出土した遺物は、土師器や須恵器の他に刀子(小刀)、土師(かま)などにかける土器を支える台座、紡錘車(あつむき)の遺跡、土玉(漆桶につける鉢)、玉瓶(酒瓶)、土師器(土師)の土器、古銭などです。 遺跡の人々は、印旛沼や鹿島川での漁や、そのおきの低地を利用した水田で稲作などを営んでいたことでしょう。神澤の遺跡発掘でも、同じ種類の遺跡が発掘調査されています。</p> <p style="text-align: right;">平成7年3月</p>

5

千葉一族供養塔



この供養塔の存在は広く知られていますが、それぞれの墓石が誰のものか余り知られていません。墓石刻字を読めば直ぐ分かる事なのですが、何故手掛けないのでしょうか？前千葉家のものです。昌胤・利胤・親胤・胤富・邦胤・重胤等の供養塔です。生実城から、本佐倉城へ、そして臼井城へと逃げ回った前千葉氏の一族です。東関東大震災で供養塔は倒れたのを整備されたものです。周囲にはこれらに従じた重臣の墓石もありますが、今だひっくり返ったままです



6

階段坂(田町愛宕坂)



山号の揮毫者が第35代総理大臣A級戦犯の平沼騏一郎です。このお寺とどのような関係が？

元々愛宕神社は、田町門から歴博への坂道を上りすぐ左手の樹々の中に、円勝寺(現在は基台のみ)その先の先端に愛宕神社(現在土台の石積みがあり)。佐倉連隊が佐倉城跡地に新設される折、城郭は勿論神社も取り壊されました。愛宕神社は現在地に移築されました。約10度、31m程です。市役所の一部の人達の通勤や買い物道にもなっています



7

愛宕神社



土井利勝が慶長16年から6年間かけて佐倉城建設の折、防火・火伏の神である芝桜田山の愛宕神社より勧請し多門ので、元は田町門の愛宕坂を上り左側の梅林の中を通り、丁度田町門(現在地より20m程左側)の真上の大父の上にはありましたが、明治8年佐倉城内の多くが軍用地となり、城郭が壊されると共に現在地にG偏在地に遷座されました。最新は5社大明神(天照大神・春日大神・鹿島大神・八幡大神・客仁大神)です。桜の秋祭りはこの愛宕神社の祭礼です



8

愛宕神社の石仏



愛宕神社の境内の一角に社があり、その中には3基の庚申塔(延宝3年=1675で2猿、市内で3番目に古い物。宝永4年=1707、寛文10年=1670)他に如意輪観音、子安観音も。文化11年=1814で変な笠を被っています

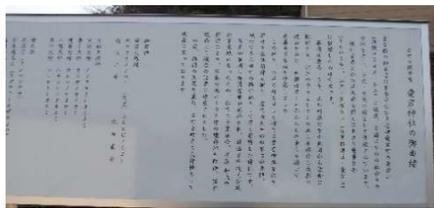


9

愛宕神社 鳥居付近



愛宕神社に並んで右側に天満宮があります



10

城崖の養生



城址公園の北側崖の数ヶ所で雑木が切られ養生の上新しい苗木が植えられていました。大丈夫かな、このような養生でまた崖崩れ？



11

重願寺



浄土真宗勝誓山。元は天神曲輪にあったようですが、現在地に移されました。ご本尊は阿弥陀如来。元は三河国岡崎にあり、聖徳太子開創に架かる上宮家の院家。元和元年(1615)佐倉城築城に際し鬼門除けとして移建。親鸞上人の祥月命日の11月3日に遺徳をしのび報恩講が行われています。社殿横の天満宮の別當寺になります



12

画家浅井忠・佐倉藩絵師 黒沼槐山・



浅井忠は個々に分骨されています。絵師の黒沼槐山の墓石が一番上の黒沼家、書家の宮崎重賢のお墓は、本堂前の墓苑入口右側に陰碑があります。本堂前墓苑入口左側には2基の歌碑があります。大きな方は明治36年造立の黒沼槐山の歌碑で門弟の青の浩(逸山)書「たづねてもきかまほしきを道の辺の 小ざさがくれにうぐいすの鳴く」です。小さい方は分らず



13

坂(仮称 重願寺坂・  
別名”おなり道”)

重願寺左横から上り坂があります。市役所の棟の横を通り上り坂。Kあ彰獣医願寺坂と命名しましたgは、かつては”おなり通”と称され重願寺への参道となるいのでしょうか。約120m・10度程。台地上から重願寺へ。更に菖蒲園から七曲坂(佐倉中学裏側)經由大手門・三の丸等へ。以前この坂の途中に変わったマンホールがあったはず？一部市役所からの下水がこの下を流れています



14

路地裏風景1



15

路地裏風景2



16

高丘稲荷神社



並木1号墳、前方後円墳で後円墳の上に稲荷社があります。社の右側には古い狐の造等があります。この付近には井戸が2つあります。また斜め向かい側には古今真佐子 著者渡邊善右衛門が若い時に住んでいた長屋がありました。佐倉城下には多くの稲荷社があり長屋の住人達の祈りの場所であったのでしょう



17	18	19	20
<p>高丘稻荷神社と石巖塔</p>	<p>路地裏風景3</p>	<p>路地裏風景4</p>	<p>坂(仮称 <sup>ナナミネザカ</sup> 七峰坂)</p>
    <p>沖縄、鹿児島に多い魔除けがこの石巖塔。市内に5、6カ所あります。お土産、出身者。この地の物は建築者が沖縄出身者だそうです。鐘木町に2、栄町に1、白井に1まだあったと思います</p>	   	  	 <p>意外と知られていない階段坂です。小字から名付けました。15度、約55m程。坂の出口には不法？恐らく擁壁の下部迄が敷地。上部のベランダ、下部のベランダを支えている鉄柱は恐らく違法？？出口は、佐倉藩刀鍛冶屋が軒を並べた地区です。見晴らしの良い坂です</p>  

21

カジサク サカ  
坂（鍛冶作の坂）



佐倉幼稚園脇の急な坂で道幅が狭い坂です。坂を上りきると麻賀多神社横の道に繋がります。約13度、115m程。歩いて登るのも一苦労。小字鍛冶作は江戸時代から良質の水が湧き出ており、刀剣鍛冶・鉄砲鍛冶等鍛冶を生業とする人達が住んだ地区です。田町の台地の尾余佐倉城の台地の尾余に狭間れた谷下で、本来は水田があった場所になります



22

## 路地裏風景6



左側は旧家片岡家の黒塀  
こんどは右側に片岡家の黒塀



23

## 麻賀多神社



成田市船形に本宮、同台方に奥宮そして佐倉市に11社、酒々井町に2社、富里市に2社、八千代市に1社計18の麻賀多神社が印旛沼郡市に祀られています。古来千葉県は「麻の産地」である事、あるいは「馬形神社」等色々な説がある。調停より国司が印旛国に派遣され統治しました。江戸時代に土井利勝佐倉城を築城・城主になった時、この神社は地方の氏神ばかりか大手門近くの現在地に鎮座し城地鎮護・佐倉藩総鎮守の神として代々城主や家臣に厚く崇敬されました。現在の本殿は老中・藩主堀田正睦が天保14年(1843)に建て替えたものです。神社の見方は正面は勿論、左右・裏側から拝殿・本殿の建屋を見るのも又楽しいものです



24

## 三つの供養塔



義烈之碑（佐倉藩士民の墓誌んの役より日清戦争出生者の顕彰碑）、忠勇の碑（佐倉藩士民の日露戦争出征者顕彰の碑と両士記念之碑（母神の役折幕府方として参戦・亡くなった木村隆吉と小柴小次郎供養塔です



25	26	27	28
<p>大手門跡と仮称 “大手門広場”</p>	<p>自由広場(仮称“三の丸広場”) 河津桜並木</p>	<p>城址公園1</p>	<p>城址公園2</p>
			
<p>かつては、市営住宅がありました。佐倉市の英断で公園化されました。大手門跡も新しく整備され芝生公園ですが、周囲に河津佐倉が植樹されています。城址公園の桜も高齢化して次第に勢いをなくしますので、その代替わりとしてこの河津桜は大きく成長し新しい観光スポットになりそうです。正式には名前がありませんが「大手門広場」と呼称するのが良いのでしょうか。自由広場は駐車場になっていますが、整備し、駐車場半分、芝生公園を「三の丸広場」と呼ぶのが城跡がら言って妥当かな？</p> 	<p>”自由広場”の名前変えませんか？例えば「三の丸広場」等と？市立体育館と東高校の間の申公園(旧市営住宅跡地)を「大手門広場」等と？</p>  	 	 

29	30	31	32
坂(へび坂)	お堀端 1	お堀端 2	お堀端 3
			
<p data-bbox="138 778 618 837">約170m、10度程。くねくね曲がっている事からへび坂と呼ばれています</p>  	 	<p data-bbox="1310 778 1366 805">出丸</p>  	  <p data-bbox="1713 1452 1960 1481">崖くずれ。養生工事中</p>

33

サカ センゲンザカ  
坂 (浅間坂)



約12度、75m程の堀端から旧浅間神社への坂道。上部にかけて浅間神社があったので一般的に「浅間坂」と言われています。へび坂と浅間坂。まだ階段坂が良坂の間に2本あります。この坂の名前はつけられていません。へび坂の上り坂、浅間坂の下り坂と考えてよいのでしょうか。**歴博側よりへび坂(下り)、同坂(上り)浅間坂(上り)、浅間坂(下り)では如何でしょうか？**



34

浅間神社跡 見晴らし台



残念！富士山は見れませんでした

35

坂 (仮称 ジョウノウチザカ  
城内坂)



約12度・45m程の大手門広場から台地下のひよどり坂近くに降りる坂です。余り知られていない階段坂！75m程、約13度



36

坂 (ひよどり坂)



約10度、110m程。市内では有名な観光スポット



37

大聖院



38

刀工細川忠義・  
儒学者 吉見南山の墓



39

藩士 西倉茂樹旧宅（修静居）



40

侍の杜1



大和田山大聖院明王寺と号し真言宗、本尊は鎌倉時代末期と謂れている大日如来です。江戸時代は佐倉藩の祈願寺です。墓苑には佐倉藩成徳書院初代総裁で儒学者の吉見南山、佐倉藩の刀工として佐倉に定住し、藩士達の刀作りに励んだ細川忠義のお墓があります。大聖院をでて左側折しすぐ右折し路地奥には佐倉眞佐子著者の渡邊善右衛門が住んでいました。200石の中藩士でした。末寺は15寺あります。**寺社を見る場合は先ず本殿まえ、拝殿でお参りをしてから境内を見せて頂く事をお忘れなく。トイレを借用する場合はお気持ちで良いからお賽銭・お布施をお願いします**

墓石ですので手をあわせて先ずお参りしてください



西村茂樹の旧宅跡です。市民体育館入口左側に刺激の弟西村勝三の実兄です。佐倉藩の支藩であった佐野藩堀田家の側用人西村芳郁の子として江戸佐野藩邸で生まれました。10才で成徳書院に入り、藩が招いた安井息軒に儒学を学び、嘉永3年大塚同庵、翌年佐久間象山に砲術を学びました。藩主の堀田正睦に積極的貿易をすすめました。明治8年から天皇・皇后への進講を約10年間勤めました。貴族議員、宮中顧問等を勤め、勲一等瑞宝章を頂いています

明治19年建築の旧士族で陸軍軍人が建てた屋敷で、江戸時代と同じ場所・建坪から見ても武家屋敷の造りになっています。庭の造りも同様です



41

## 侍の杜2

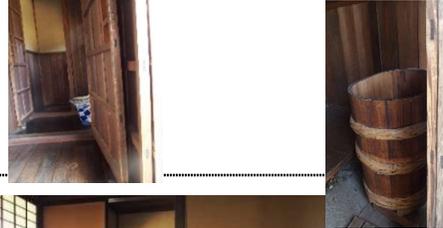


42

## 武家屋敷1(河原家)



武家屋敷通りにあったものが移築されたものです(武居家も同様移築)。弘化2年(1845)3月には存在していた事が古文章で分かっています。・3棟の屋敷の中では一番古いものです。特徴は、主屋全体がL字状に曲がり、突き出た部分が接客用座敷である事。但馬家でも同様L字型です。住宅全体から見てこの接客座敷の占有面積が広く、住居部分との分離が明確なところ。土間・茶の間・納戸・湯殿の作りには関心があります。居間は主人の居室兼書齋に。納戸は板敷ですが、ここが家族の寝室に



43

## 武家屋敷2(但馬家)



文政4年(1821)～天保8年(1837)に建てられた事が文献や絵図から判明。特徴は屋根の形がT字状で、南北に突き出た部分に土間・茶の間・納戸があり、住居部分と接客部分が近接した構造である。河原家住宅と比較すると、茶の間、台所の板の間が分かれ部屋になっている事と土間が小さい事です。3棟の風呂、湯殿、台所、便所を比較するのも又面白いです



44

## 武家屋敷3(武居家)



この受有宅は基準からみて100石未満の屋敷になります。間取りは、東側に玄関・座敷の接客空間、西側に南から土間・口の間・八畳の間と続きます。土間・台所・湯殿が家族生活の間です。各部屋に押し入れがありません。接客部分が北側に。家族空間が南側に在ります。一般的に接客空間を重んじ南側にしますが、武居家は生活空間で、非常に珍しい間取りです



45

武家屋敷通り



この武家屋敷3棟以外に、道の両側には旧藩士の屋敷の敷地が並んでいますが、屋敷そのものが現代風建物に変わったり、授民が住んでおられるため非公開になっています



46

坂（薬師坂）



坂の上部右側に薬師堂があったようですが昭和4年に焼失しました。現在は民家が新築されています。武家屋敷の一面の薬師堂でした。本尊の薬師如来像は寺崎川で投げ網にかかって引き揚げたものです。薬師堂にあった薬師如来像と両脇侍は無事持ち出され、周徳院に安置されています。室町時代作でかや材の寄木造で像高94.5cm。頭頂部が高く盛り上がり、頭髪が網目の渦紋状という特徴がある。大佐倉曹洞宗勝胤寺の末寺で薬師堂の別当寺であった



↑周徳院の薬師如来と両脇侍？ちょっと違うぞ！



47

石敢當



薬師坂上右の旧家で本来は農家の方です。中央公民館の市民カレッジ講師等をされておられます。佐倉市の歴史については、先ず内田先生にお聞き！と謂れています。家の前右側には畑地や貸アパート、水田は台地下一帯にあったそうです



こちらは高岳稲荷社前の石敢當です

48

蔵



農家の蔵にしては大きなものです。家の敷地も広いのが特徴です。台地上の畑より台地下の水田が広がったのでしょう。但し鹿島川の支流の高崎川でするので、川の氾濫も多くご苦労をされたのでは



49

坂（やかん坂）



80m程、約14度の階段坂です。権現坂の下から台地上に上る坂です



50

路地裏風景 7



51

権現神社



祠のなかには、北山神社を真ん中に古峯神社と三峯神社が松入られています。さてこの北山神社はどこの神社か分かりませんか？権現神社とどう関係があるのでしょうか？家康を称する権現様とは異なる権現様？



52

路地裏風景 8



この一帯もかつては中・下級の武家屋敷が並んでいました



53

## 佐倉養生所跡



佐藤尚中は順天堂を益々充実させる一方、佐倉藩の寛保廃止等思い切った医政改革を推進し、幕末の慶應3年(1867)に官製の近代的静養病院「佐倉養生所」を設立した。ご存知でしょうが、日本の蘭方外科医の最高峰を極めた尚中は、明治2年(1869)明治政府に招かれ大學東校(現東大医学部)を主催した。教授陣27名のうち20名は佐倉順天堂関係者でした。尚中は、明治6年(1873)東京湯島に順天堂医院を開いた。”病院”ではなく”医院”です。これは「大勢の辞める人々を治療する所は病院ではなく医院と呼ぶのが正しい」という尚中の石を受け継いだものです。但し今は順天堂病院ですが



54

## 旧平井家(国登録文化財)



江戸時代以来の有力商家で、藩の御用商人として薪炭類を扱っていた。明治5年には新制度の郵便御用取り扱いになり、佐倉郵便局の起源徒なった。取扱所は新町43地(現在の房州蕎麦屋の向かい)。明治一時期休業、同後期には酒屋となり新町の大手商家の一つとして勢いを取り戻した。しかし小さな城下町です。豪商とは言えません。店舗兼主屋；永治19年焼失、明治20～24年建替え、座敷棟；昭和6年、脇蔵(石造)；大正6年築で土蔵造り2階建、大谷石の2階建蔵は詳細不明



55

## 黒塚の片岡家屋敷と蔵



当地には元片岡セトモノ店があったようです。丁度戦前から戦後にかけてあったようです。裏新町の薪炭・米穀を扱ったの片岡商店と何らかの縁戚関係があるのでしょうか？大きな敷地や門や黒部堀等が特徴。大きな蔵は現在車庫として使用されています



56

## 並木町の武家屋敷跡路地裏風景1



57

並木町の武家屋敷跡路地裏風景2



58

坂 (仮称 カブラギ マチザカ 鎌木町坂)



59

京成桜駅



昨年に続き市内は”佐倉”が”桜”に模様替え

掛け番1



自宅前のこぶしが満開



大正15年京成佐倉駅。昭和37年現在地に移転